

新しい部活動の指導方法

体罰指導から主体的指導

氏名(掲載は自由)菅原杏志朗

要旨本文 (文字数は自由)

近年、日本の部活動において体罰や暴言、過度な統制を伴う指導が社会問題となっている。本研究は、従来の体罰的・管理的指導から脱却し、生徒の主体性を重視した新しい部活動指導の在り方を明らかにすることを目的とする。筆者自身の部活動経験を出発点とし、桜宮高校や岡山操山高校などの体罰事例、広陵高校のいじめ問題を通して、指導環境が生徒の心身に与える深刻な影響を検討した。また、勝利至上主義や根性論が体罰を温存してきた構造的背景について先行研究を踏まえて分析した。さらに、慶應義塾高校野球部や青山学院大学駅伝部の事例を取り上げ、生徒主体・分業型・外部指導者活用といった令和型の指導方法が、体罰に依存せず成果を上げていることを示した。加えて、教員の過重負担や部活動の持続可能性の問題にも着目し、外部指導者や学生コーチの導入による負担軽減の可能性を考察した。本研究は、部活動を勝敗中心の場ではなく人間的成長を促す教育の場として再定義し、「教える指導」から「支える指導」への転換こそが、今後の部活動に求められる方向性であることを明らかにするものである。

フォントサイズ：タイトルのみ 18pt、その他 10.5～11pt

和文フォント：MS 明朝

欧文フォント：Times New Roman